

緊急人道支援学会 ラウンドテーブルセッション

対外援助・支援規模の差異と要因：ウクライナとスーダンの比較

■ 要旨

人道援助への資金の流れが著しく減少している今日、支援を必要としている人々にどのように援助を提供していくのか、また限られた資源をどのように配分するのかは重要な課題である。本ラウンドテーブルは、各発表者の実務経験を踏まえ、ニーズに対するドナーの関心度の差、コミュニティ主体の対応可能性、メディア露出と国際的注目度の影響について問題提起を行う。ウクライナとスーダンを事例として、国際社会における関心度および対外援助規模の顕著な差異について検討し、その構造的要因を参加者とともに考察することを目的とする。発表では、資金拠出水準や政治的優先度、メディア露出といった可視的要因に加え、地理的近接性や当事者間に形成されてきた関係性を背景とする関心度の差異が人道アクセスや支援実施に及ぼす影響について、現場での実感を含めて整理する。参加者との対話を通じ、限られた資源をいかに有効に活用しうするのか、人道支援システムに内在する構造的課題と今後の改善の方向性を多角的に議論することを期待している。

■ 発表者の発表内容・略歴、およびファシリテーター、コメンテーターの略歴

発表者

1. **土肥 侗**：ウクライナとスーダンでの現場経験から「支援規模の差」が現場に与える影響について発表する。UN Women スーダンでの紛争下における女性支援やモルドバ共和国でのウクライナ危機対応経験を有し、現在 UNHCR パキスタンにてアフガン難民支援に従事。
2. **村中 千廣**：米国の対外援助方針転換による影響（特にウクライナとスーダンへの影響）、地理的近接性や二国間関係を背景とする関心度の差異が人道アクセス等に及ぼす影響について発表する。在ウガンダ日本大使館での勤務経験を経て現在 UNFP バングラデシュで人道調整に携わる。
3. **班 学人**：メディアの報道が人道支援に及ぼす影響と、人道危機が報道されるか否かを左右する要因について発表し、認知度向上の余地などについて議論する。前職では NHK のディレクターとして人道危機に関する番組を制作。現在は UNHCR ナイジェリアで国内避難民支援に従事。

ファシリテーター

片柳 真理：国連 PKO、国際機関勤務などを経て現在広島大学大学院人間社会科学研究科

教授。専門は国際法、平和構築。

■ セッションの流れ (Plan of the Session)

ファシリテーターが企画趣旨を説明したのち、3人の発表者がそれぞれ発表。その後、質疑応答及び参加者とのディスカッションを予定。

■ その他

発表者はいずれも海外からオンラインで参加予定。ファシリテーターは会場参加。なお、発表者3名は現在国連ボランティアとして現場で活躍している若手実務家であり、同様に人道支援に従事する方々、また人道支援を緊急する方々との率直な意見交換を希望している。